

「嫌だ、——っ」

「あんまり暴れないで欲しいなあ。怪我するよ?」

告げる声音は優しさすら含んでいる。けれど、ぎり、と腕をひねられる痛みは紛れもなく臨也が与えたものだ。

臨也がその気になれば、帝人の骨を折るくらいのこととはたやすいに違いない。けれど、それでも嫌なもの嫌だった。

「何、で……っ。臨也さんなら、こんなこと、する相手……っ、いくらでも、いるじゃない、ですか……っ!」

切れ切れに、どうにか叫ぶ。よりによつてこんな貧弱な男を選ぶ理由など、臨也には全くないはずだ。それなのに。

「うん、相手はいっぱいいるよ。俺に抱かれたい子なんて、いくらでもいる」

「だったら!」

「でも、俺が今、抱きたいのは帝人君みたいなんだよね」

どこか他人事のように、臨也は言う。

「ほかの子を抱いてみたけど、妙に味気なくてさ。まあ、わりと元から淡泊なんだけど」

「いや、それは嘘ですよ」

だって恋人ごっこ頃は、一度関係を持ったら当たり前のように逢うたびに求められた。疲労困憊するから一度だけ、という約束だったのに破られたことも何度かある。二度どころか三度目を求められることもあったし、失神するまで離してもらえないことだってあった。どう考えてもそんな男は淡泊じゃない。

「本当だってば。帝人君とは物珍しいからか、ちよつと無理させたけど」

この体勢でなければ、きつと臨也は肩をすくめて見せたろう。けれど今は相変わらず帝人を押し倒し、いかにも襲っています、という風体だった。

「とにかく、僕はもう臨也さんとはしなないです。ああいうことは、恋人だったからしたんです……っ」

「恋人『ごっこ』だったのに?」

「……っ」
恋人ではなく、恋人ごっこにすぎない。それでも身体を許した癖にと臨也は告げる。

そうか、と思う。

（臨也さんは、僕が臨也さんに恋してるって、知ってる。だからからかってるんだ）

恋人ごっこが終わっても、まだ完全に恋心は冷めてない。そう知っているから、ちよつかいをかけて心を揺さぶって楽しむつもりなのだ。そうに違いない。

「そう、ですね。ごっこでした。でも、形式上は恋人でしたから」

まねごとにすぎなかったけれど、傍目に見れば恋人そのものだったはずだ。だって彼は演技がとて巧かったから。

「今は、違いますよね。もう終わりました。だから、しませんでした」

「それで、俺以外の誰かと恋人になるんだ?」

「……そうかもしれせん」